

二人の爆乳変身ヒロインが

触手に犯され

ふたなり化し
強制SEXさせられる!!

獣換
ビーストファイター
SP04



次元を超えてやってきた
淫魔衆の罠によりブルーラビットは敗北。
彼女が別次元に連れ去られようとした時、
紅い閃光がそれを阻止した。
それは淫魔衆とを追ってこちらの
次元にやってきた拜帝院忍者、マライヤだった。

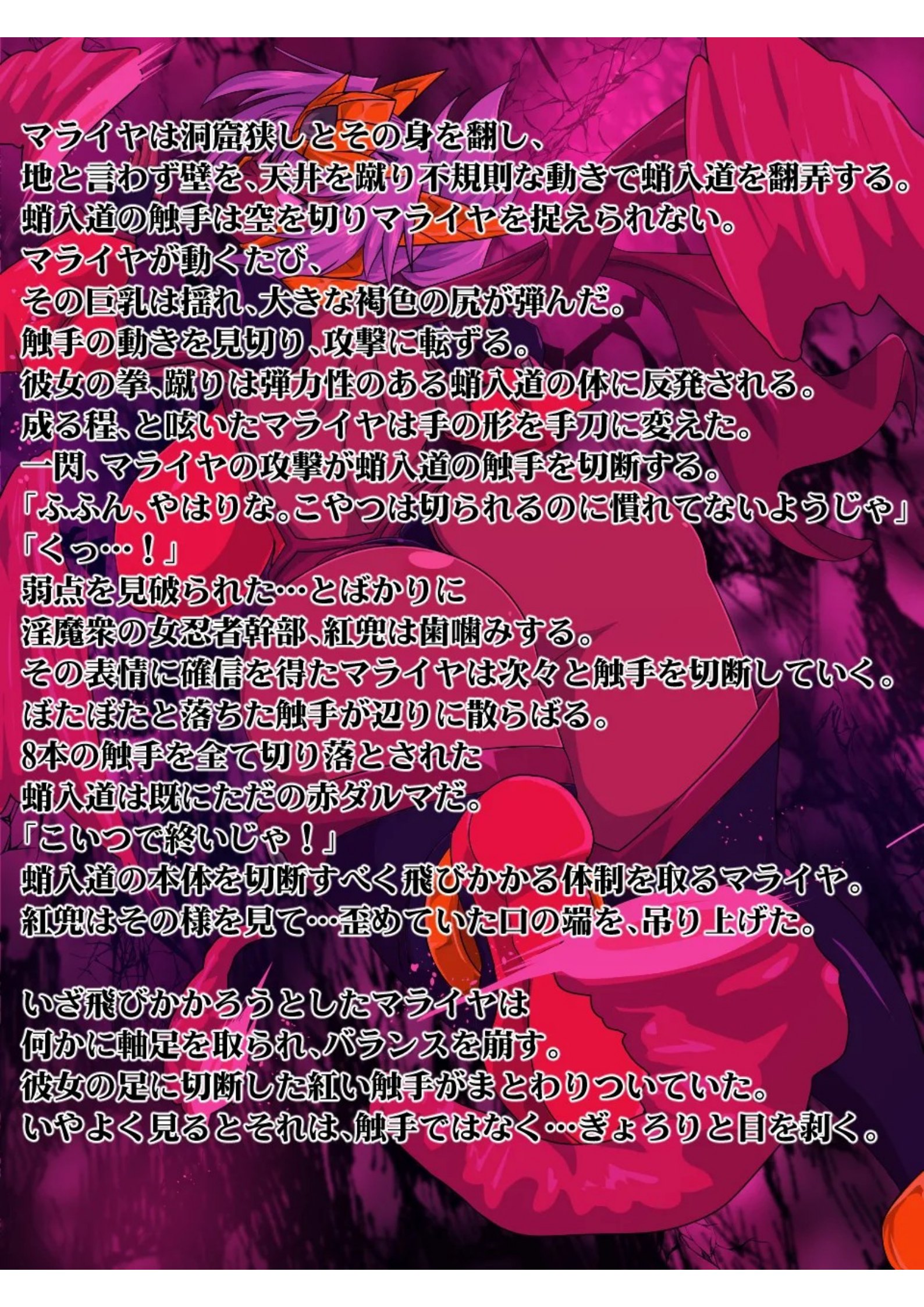
拜帝院忍者マライヤ——
淫魔衆との因縁深き忍者。

彼女は数百年前、
その身を賭して淫魔衆を封印。
しかし現代にその封印が解かれてしまう。

淫魔衆を封印ではなく、
討滅すべく戦い続けている。

そして、ブルーラビット達のいる世界に
敵の術によって迷い込んだ彼女は今、
淫魔衆を追う中ここにたどり着いたのだった。





マライヤは洞窟狭しとその身を翻し、
地と言わず壁を、天井を蹴り不規則な動きで蛸入道を翻弄する。
蛸入道の触手は空を切りマライヤを捉えられない。

マライヤが動くたび、
その巨乳は揺れ、大きな褐色の尻が弾んだ。

触手の動きを見切り、攻撃に転ずる。

彼女の拳、蹴りは弾力性のある蛸入道の体に反発される。

成る程、と呟いたマライヤは手の形を手刀に変えた。

一閃、マライヤの攻撃が蛸入道の触手を切断する。

「ふふん、やはりな。こやつは切られるのに慣れてないようじゃ」

「くっ…！」

弱点を見破られた…とばかりに

淫魔衆の女忍者幹部、紅兜は歯噛みする。

その表情に確信を得たマライヤは次々と触手を切断していく。

ぼたぼたと落ちた触手が辺りに散らばる。

8本の触手を全て切り落とされた

蛸入道は既にただの赤ダルマだ。

「こいつで終いじゃ！」

蛸入道の本体を切断すべく飛びかかる体制を取るマライヤ。

紅兜はその様を見て…歪めていた口の端を、吊り上げた。

いざ飛びかかろうとしたマライヤは
何かに軸足を取られ、バランスを崩す。

彼女の足に切断した紅い触手がまとわりついていた。

いやよく見るとそれは、触手ではなく…ぎょろりと目を剥く。



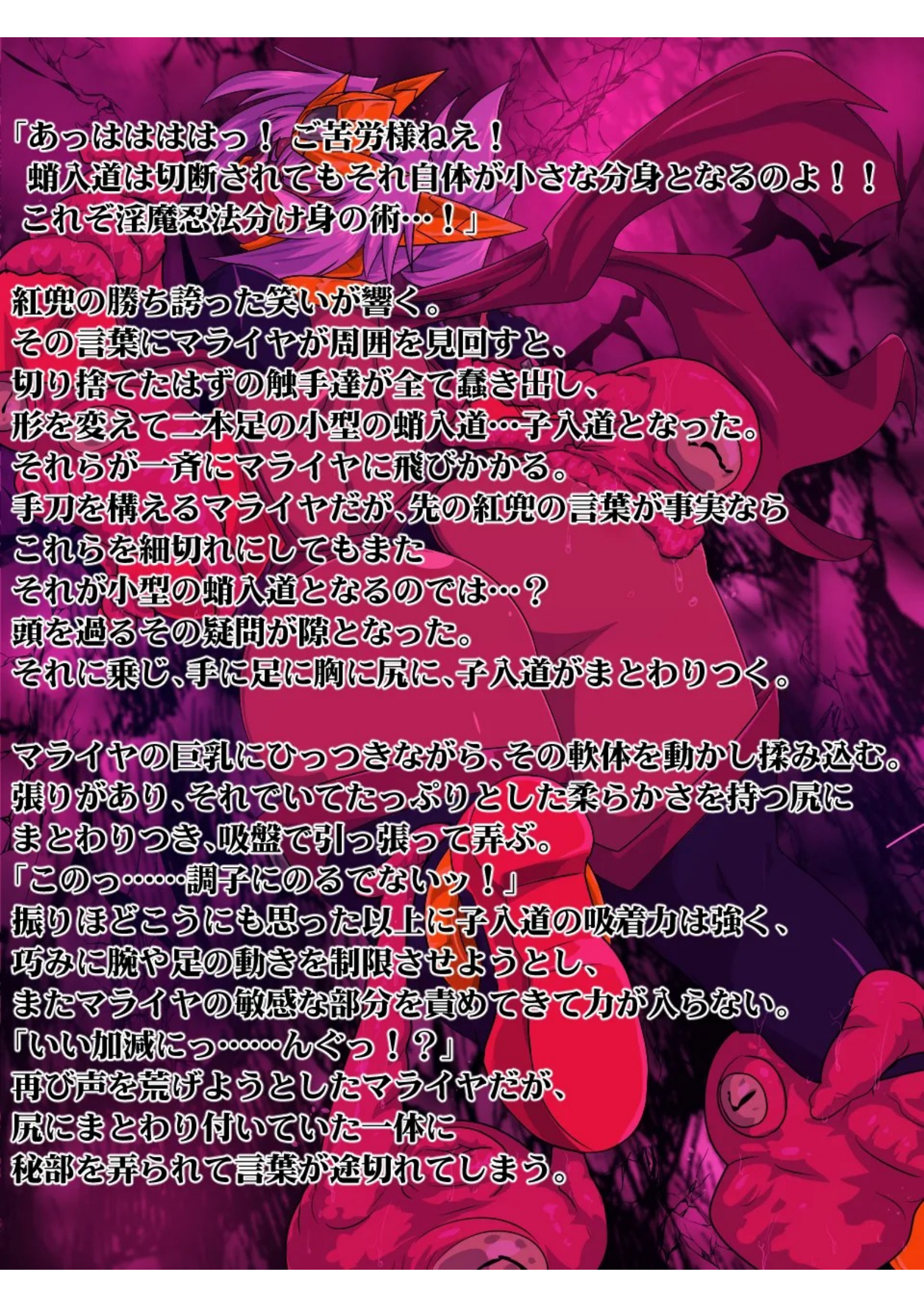
なっ...

たっ♡

なっ♡

なっ♡

このっ...
貴様らっ.....!?

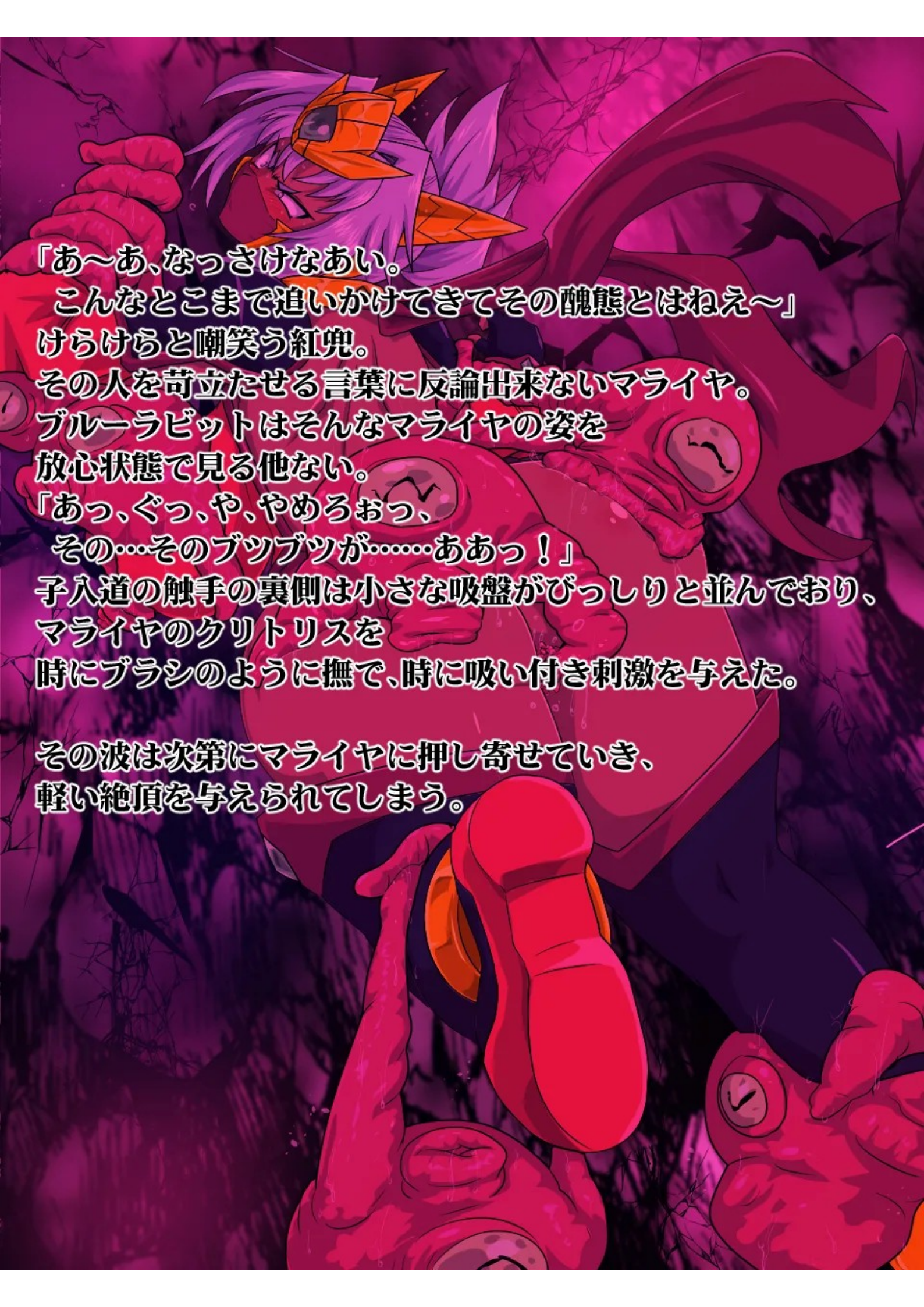


「あっははははっ！ ご苦労様ねえ！
蝟入道は切断されてもそれ自体が小さな分身となるのよ！！
これぞ淫魔忍法分け身の術…！」

紅兜の勝ち誇った笑いが響く。
その言葉にマライヤが周囲を見回すと、
切り捨てたはずの触手達が全て蠢き出し、
形を変えて二本足の小型の蝟入道…子入道となった。
それらが一斉にマライヤに飛びかかる。
手刀を構えるマライヤだが、先の紅兜の言葉が事実なら
これらを細切れにしてもまた
それが小型の蝟入道となるのでは…？
頭を過るその疑問が隙となった。
それに乗じ、手に足に胸に尻に、子入道がまとわりつく。

マライヤの巨乳にひつつきながら、その軟体を動かし揉み込む。
張りがあり、それでいてたっぷりとした柔らかさを持つ尻に
まとわりつき、吸盤で引っ張って弄ぶ。
「このっ……調子にのるでないッ！」
振りほどこうにも思った以上に子入道の吸着力は強く、
巧みに腕や足の動きを制限させようとし、
またマライヤの敏感な部分を責めてきて力が入らない。
「いい加減にっ……んぐっ！？」
再び声を荒げようとしたマライヤだが、
尻にまとわり付いていた一体に
秘部を弄られて言葉が途切れてしまう。





「あ～あ、なっさけなあい。

こんなところまで追いかけてきてその醜態とはねえ～」
けらけらと嘲笑う紅兜。

その人を苛立たせる言葉に反論出来ないマライヤ。
ブルーラビットはそんなマライヤの姿を
放心状態で見ると他ない。

「あっ、ぐっ、や、やめろおっ、

その…そのブツブツが……ああっ！」
子入道の触手の裏側は小さな吸盤がびっしりと並んでおり、
マライヤのクリトリスを
時にブラシのように撫で、時に吸い付き刺激を与えた。

その波は次第にマライヤに押し寄せていき、
軽い絶頂を与えられてしまう。



やつ...やめ...
引っ張るでないッ

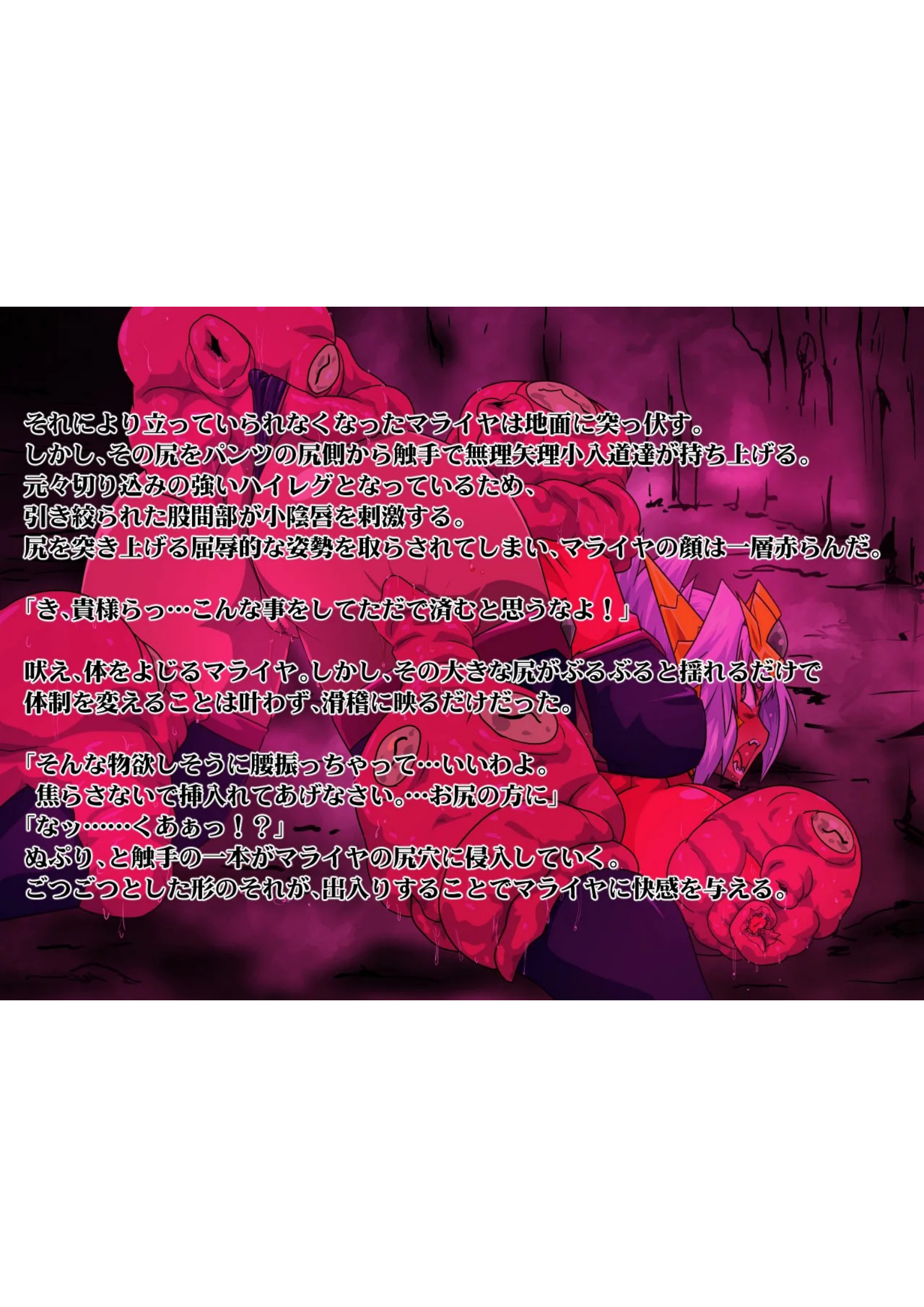
ぱんっ♡

ゅ♡

ぱんっ♡

ぱんっ♡

ぱんっ♡



それにより立っていられなくなったマライヤは地面に突っ伏す。
しかし、その尻をパンツの尻側から触手で無理矢理小入道達を持ち上げる。
元々切り込みの強いハイレグとなっているため、
引き絞られた股間部が小陰唇を刺激する。
尻を突き上げる屈辱的な姿勢を取らされてしまい、マライヤの顔は一層赤らんだ。

「き、貴様らっ…こんな事をしてただで済むと思うなよ！」

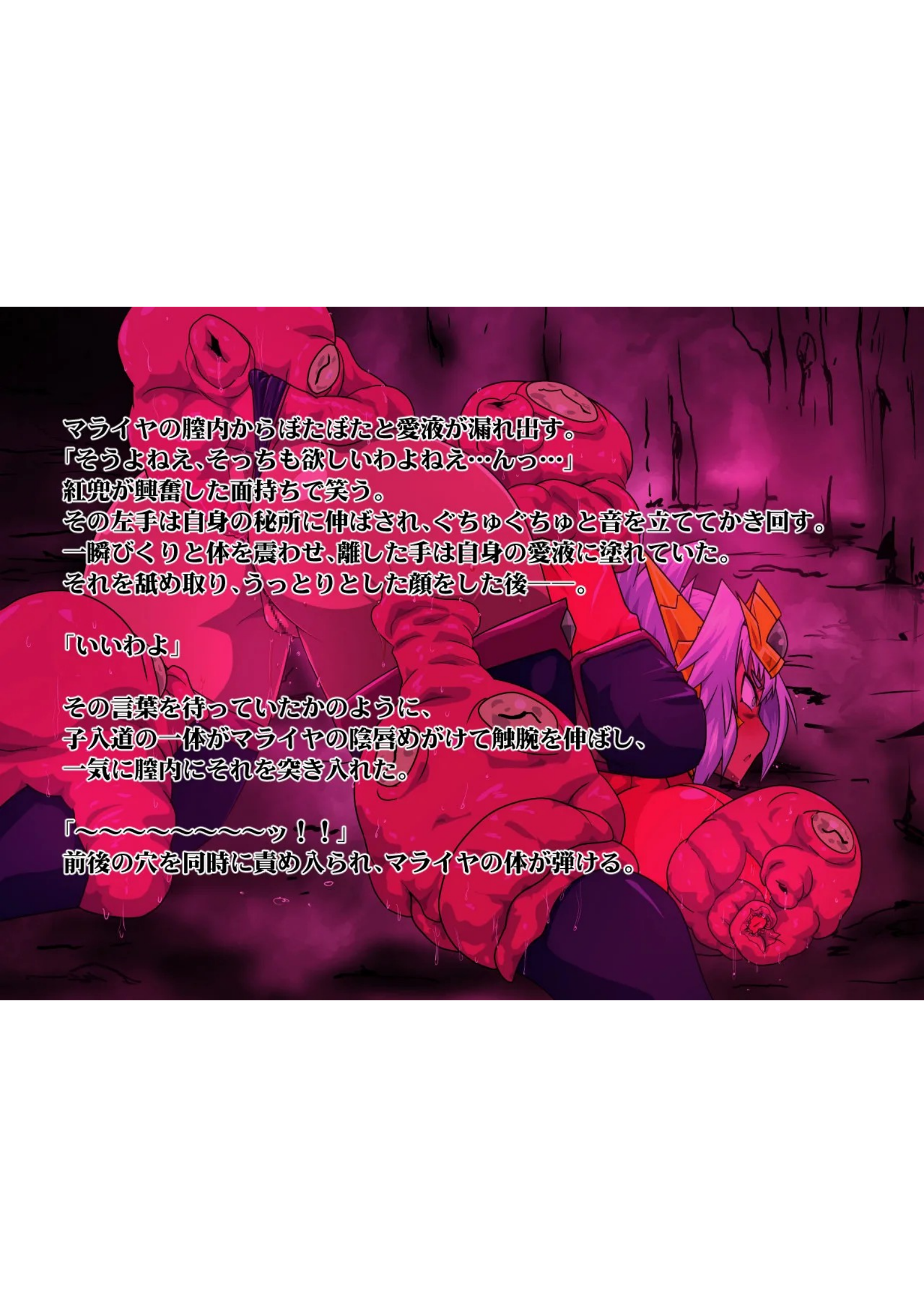
吠え、体をよじるマライヤ。しかし、その大きな尻がぶるぶると揺れるだけで
体制を変えることは叶わず、滑稽に映るだけだった。

「そんな物欲しそうに腰振っちゃって…いいわよ。
焦らさないで挿入れてあげなさい。…お尻の方に」

「なッ……くあぁっ!？」

ぬぷり、と触手の一本がマライヤの尻穴に侵入していく。
ごつごつとした形のそれが、出入りすることでマライヤに快感を与える。





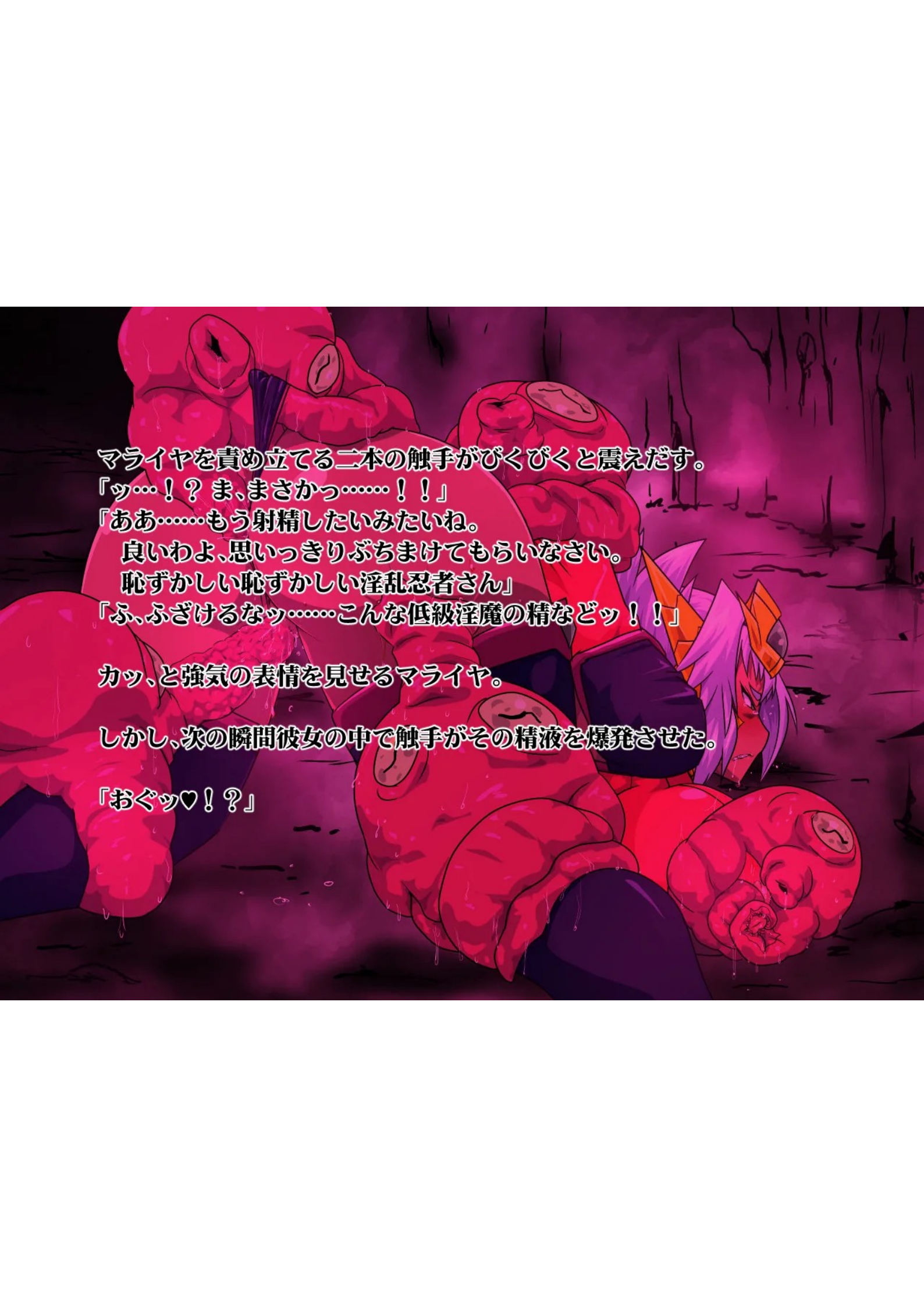
マライヤの膣内からぼたぼたと愛液が漏れ出す。
『そうよねえ、そっちも欲しいわよねえ…んっ…』
紅兜が興奮した面持ちで笑う。
その左手は自身の秘所に伸ばされ、ぐちゅぐちゅと音を立ててかき回す。
一瞬びくりと体を震わせ、離れた手は自身の愛液に塗れていた。
それを舐め取り、うっとりとした顔をした後——。

『いいわよ』

その言葉を待っていたかのように、
子入道の一体がマライヤの陰唇めがけて触腕を伸ばし、
一気に膣内にそれを突き入れた。

『~~~~~ッ！！』
前後の穴を同時に責め入れられ、マライヤの体が弾ける。





マライヤを責め立てる二本の触手がびくびくと震えだす。

「ッ…！？ ま、まさかっ……！！」

「ああ……もう射精したいみたいね。

良いわよ、思いっきりぶちまけてもらいなさい。

恥ずかしい恥ずかしい淫乱忍者さん」

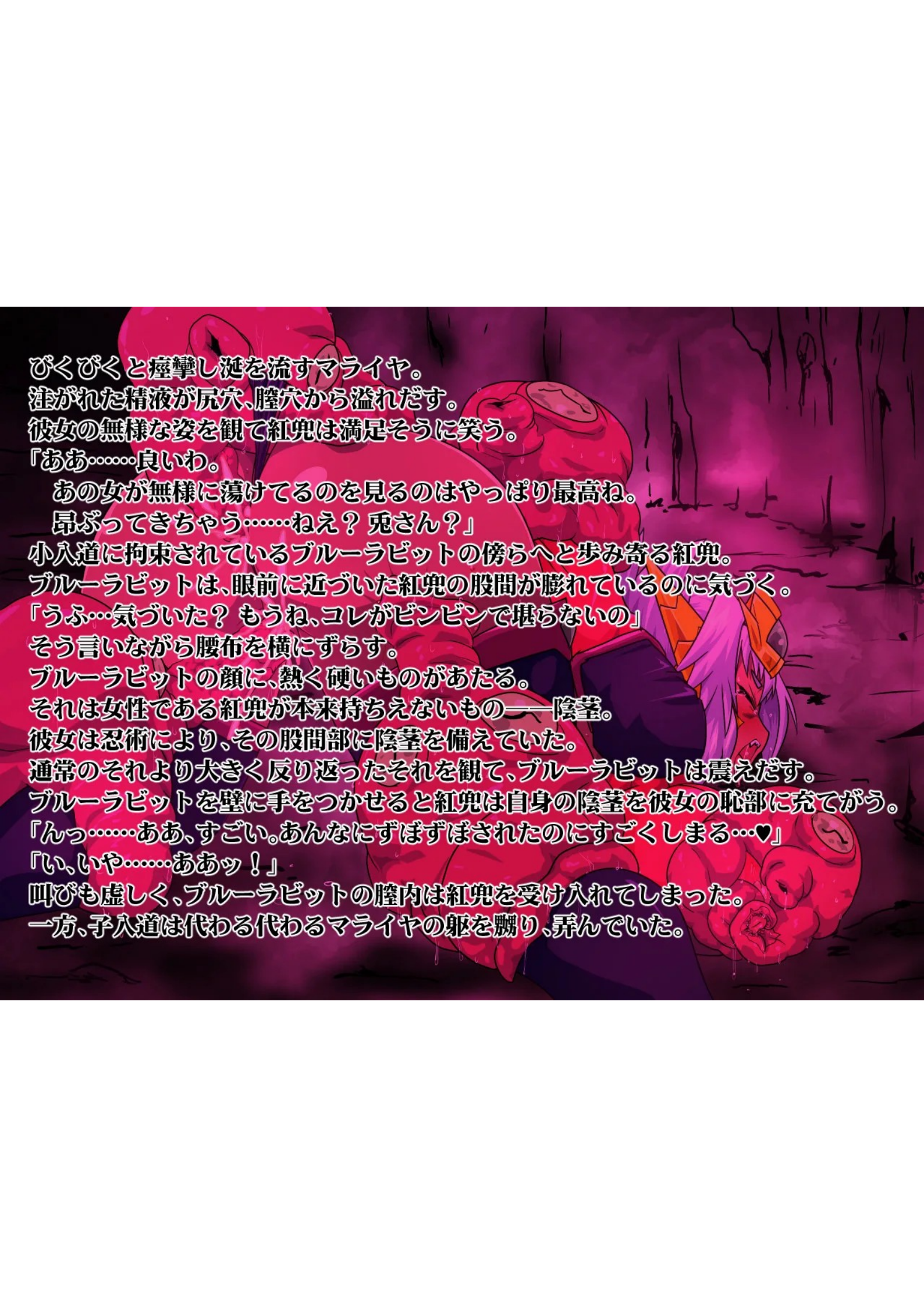
「ふ、ふざけるなッ……こんな低級淫魔の精などッ！！」

カッ、と強気 of 表情を見せるマライヤ。

しかし、次の瞬間彼女の中で触手はその精液を爆発させた。

「おぐッ♡！？」

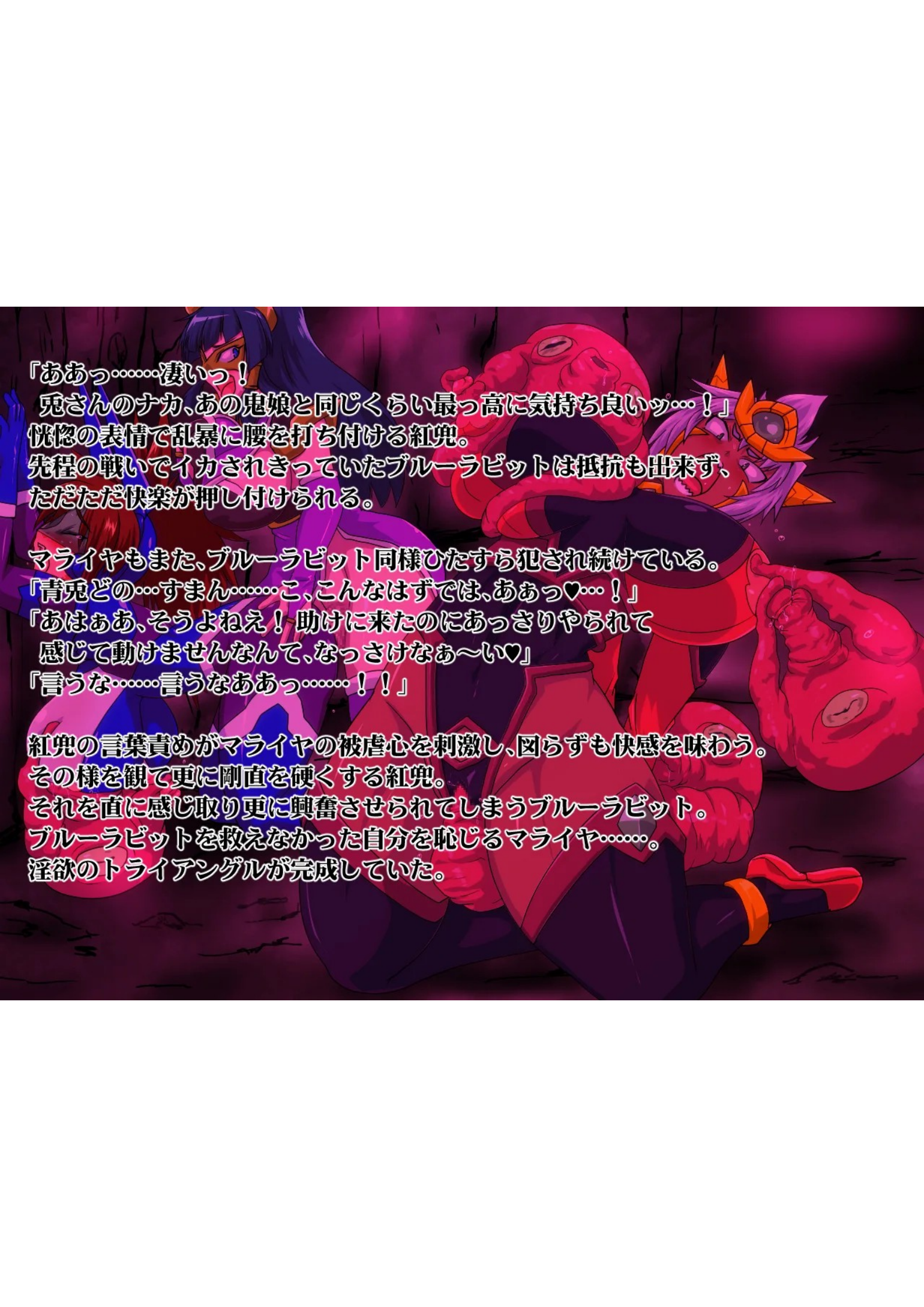




びくびくと痙攣し涎を流すマライヤ。
注がれた精液が尻穴、膣穴から溢れだす。
彼女の無様な姿を観て紅兜は満足そうに笑う。
「ああ……良いわ。

あの女が無様に蕩けてるのを見るのはやっぱり最高ね。
昂ぶってきちゃう……ねえ？ 兎さん？」
小入道に拘束されているブルーラビットの傍らへと歩み寄る紅兜。
ブルーラビットは、眼前に近づいた紅兜の股間が膨れているのに気づく。
「うふ…気づいた？ もうね、コレがビンビンで堪らないの」
そう言いながら腰布を横にずらす。
ブルーラビットの顔に、熱く硬いものがあたる。
それは女性である紅兜が本来持ちえないもの——陰茎。
彼女は忍術により、その股間部に陰茎を備えていた。
通常のそれより大きく反り返ったそれを観て、ブルーラビットは震えだす。
ブルーラビットを壁に手をつかせると紅兜は自身の陰茎を彼女の恥部に充てがう。
「んっ……ああ、すごい。あんなにずぼずぼされたのにすごくしまる…♥」
「い、いや……ああッ！」
叫びも虚しく、ブルーラビットの膣内は紅兜を受け入れてしまった。
一方、子入道は代わる代わるマライヤの軀を膣り、弄んでいた。





「ああっ……凄いつ！

兎さんのナカ、あの鬼娘と同じくらい最っ高に気持ち良いッ…！」

恍惚の表情で乱暴に腰を打ち付ける紅兜。

先程の戦いでイカされきっていたブルーラビットは抵抗も出来ず、ただただ快樂が押し付けられる。

マライヤもまた、ブルーラビット同様ひたすら犯され続けている。

「青兎どの…すまん……こ、こんなはずでは、ああっ♡…！」

「あはああ、そうよねえ！ 助けに来たのにあっさりやられて

感じて動けませんなんて、なっさけなあ〜い♡」

「言うな……言うなああっ……！！」

紅兜の言葉責めがマライヤの被虐心を刺激し、囚らずも快感を味わう。

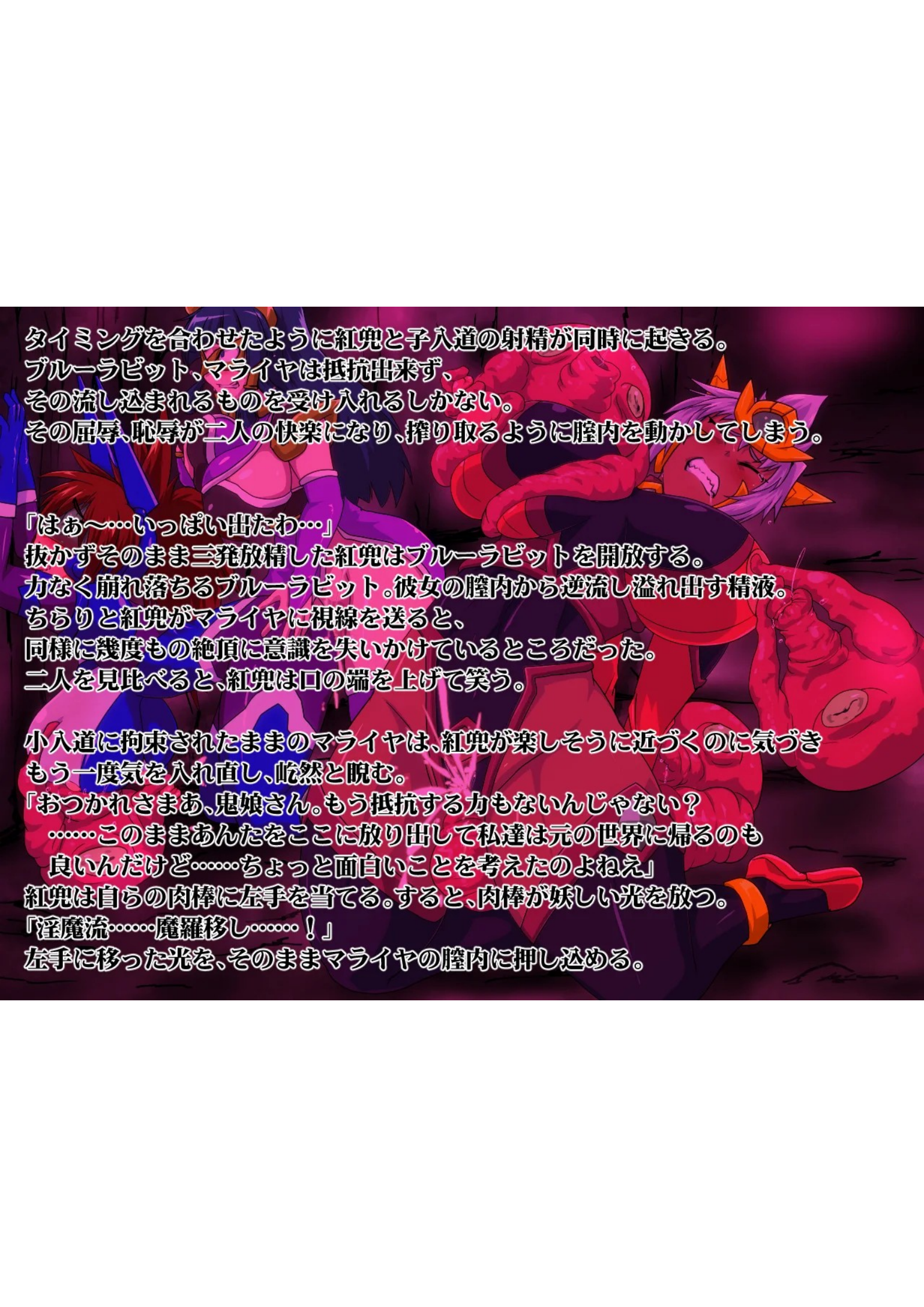
その様を観て更に剛直を硬くする紅兜。

それを直に感じ取り更に興奮させられてしまうブルーラビット。

ブルーラビットを救えなかった自分を恥じるマライヤ……。

淫欲のトライアングルが完成していた。





タイミングを合わせたように紅兜と子入道の射精が同時に起きる。
ブルーラビット、マライヤは抵抗出来ず、
その流し込まれるものを受け入れるしかない。
その屈辱、恥辱が二人の快楽になり、搾り取るように膣内を動かしてしまう。

「はあ〜…いっぱい出たわ…」
抜かずそのまま三発放精した紅兜はブルーラビットを開放する。
力なく崩れ落ちるブルーラビット。彼女の膣内から逆流し溢れ出す精液。
ちらりと紅兜がマライヤに視線を送ると、
同様に幾度もの絶頂に意識を失いかけていたところだった。
二人を見比べると、紅兜は口の端を上げて笑う。

小入道に拘束されたままのマライヤは、紅兜が楽しそうに近づくのに気づき
もう一度気を入れ直し、屹然と睨む。

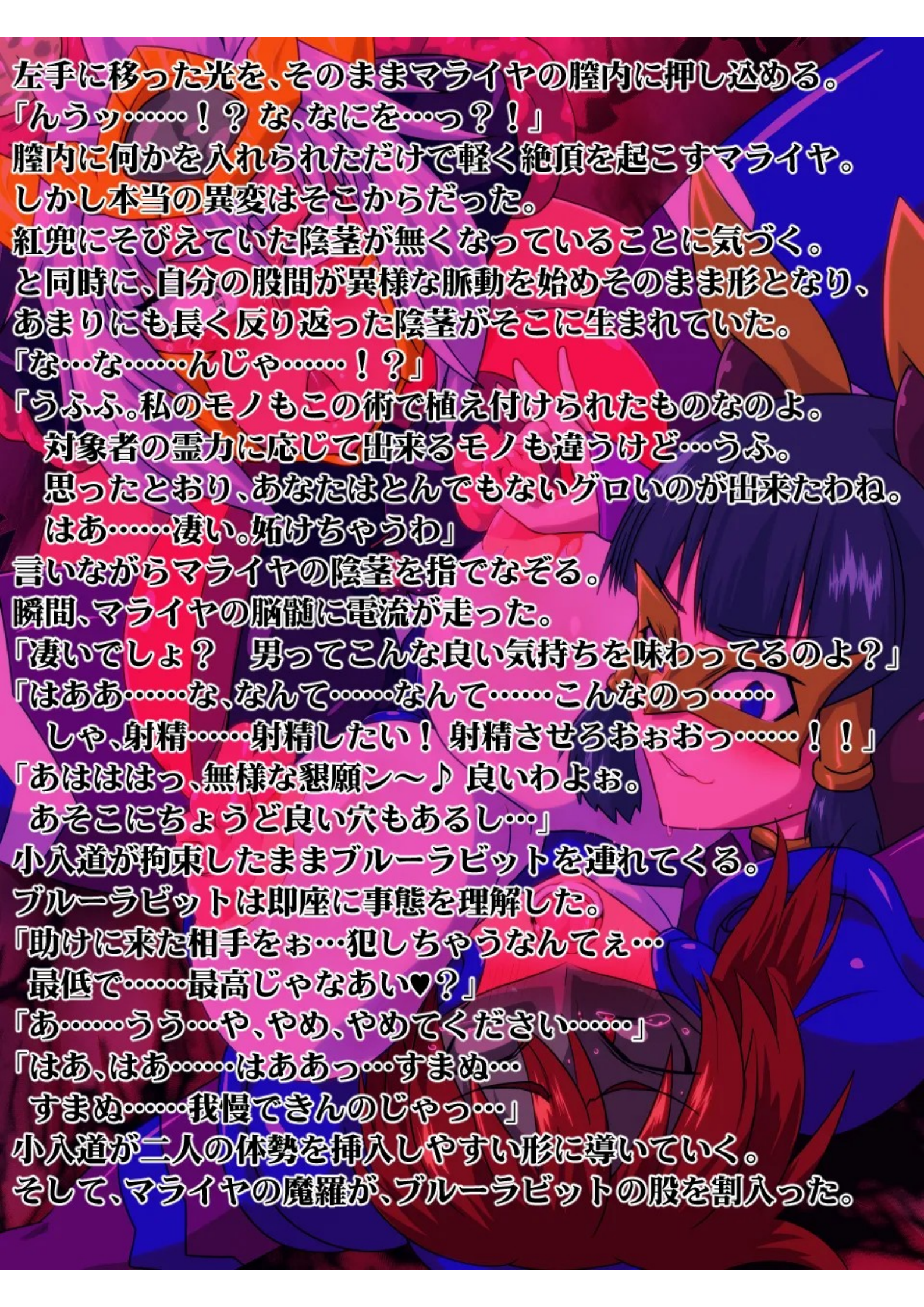
「おつかれさまあ、鬼娘さん。もう抵抗する力もないんじゃない？

……このままあんたをここに放り出して私達は元の世界に戻るのも
良いんだけど……ちょっと面白いことを考えたのよねえ」

紅兜は自らの肉棒に左手を当てる。すると、肉棒が妖しい光を放つ。

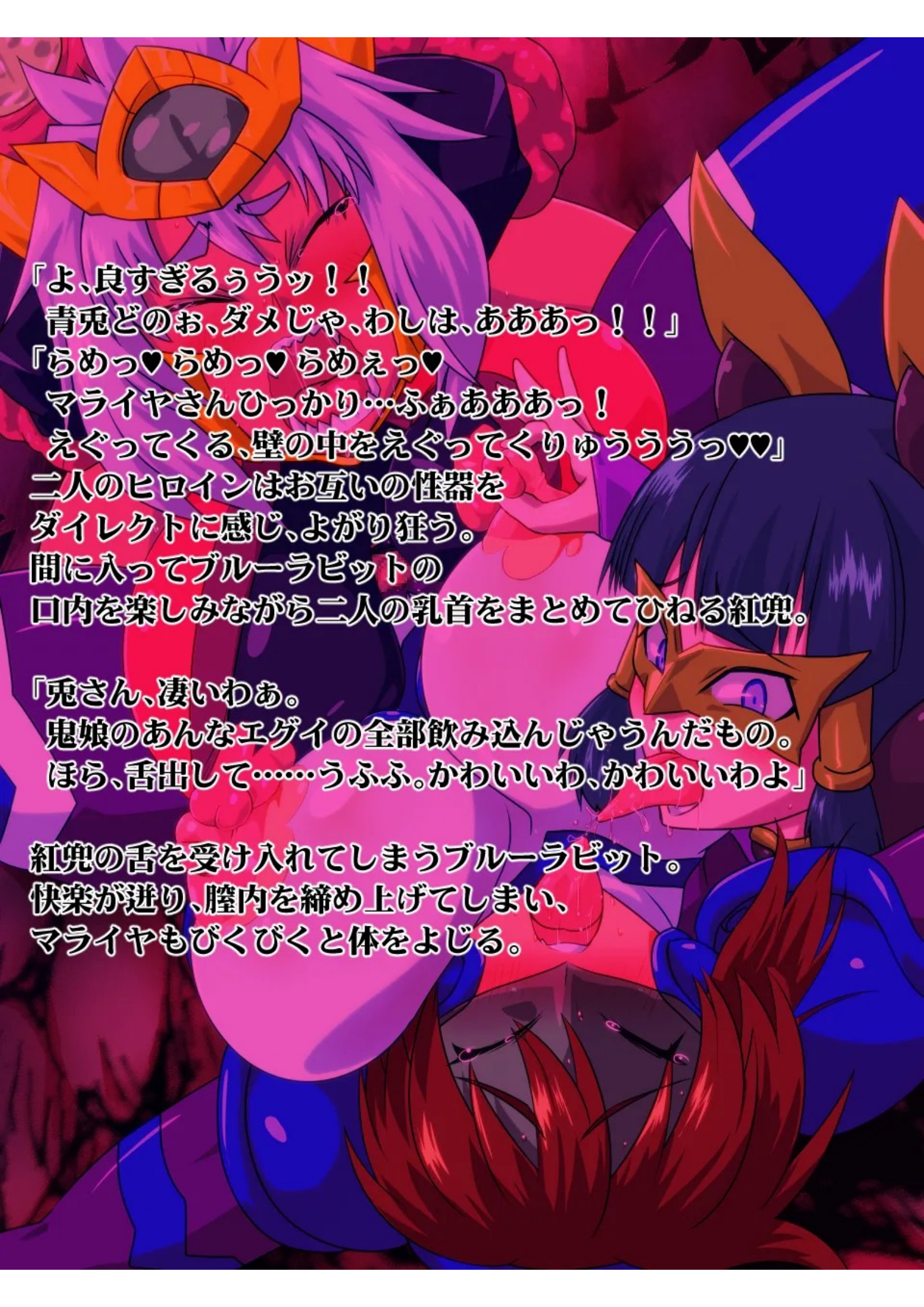
「淫魔流……魔羅移し……！」

左手に移った光を、そのままマライヤの膣内に押し込める。



左手に移った光を、そのままマライヤの膣内に押し込める。
「んうッ……！？ な、なにを…っ？！」
膣内に何かを入れられたただけで軽く絶頂を起こすマライヤ。
しかし本当の異変はそこからだった。
紅兜にそびえていた陰茎が無くなっていることに気づく。
と同時に、自分の股間が異様な脈動を始めそのまま形となり、
あまりにも長く反り返った陰茎がそこに生まれていた。
「な…な……んじゃ……！？」
「うふふ。私のモノもこの術で植え付けられたもののなのよ。
対象者の霊力に応じて出来るモノも違うけど…うふ。
思ったとおり、あなたはとんでもないグロいのが出来たわね。
はあ……凄い。妬けちゃうわ」
言いながらマライヤの陰茎を指でなぞる。
瞬間、マライヤの脳髓に電流が走った。
「凄いでしょ？ 男ってこんな良い気持ちを味わってるのよ？」
「はああ……な、なんて……なんて……こんなのっ……
しゃ、射精……射精したい！ 射精させろおおっ……！！」
「あはははっ、無様な懇願ン〜♪ 良いわよお。
あそこにちょうど良い穴もあるし…」
小入道が拘束したままブルーラビットを連れてくる。
ブルーラビットは即座に事態を理解した。
「助けに来た相手をお…犯しちゃうなんてえ…
最低で……最高じゃなあい♡？」
「あ……うう…や、やめ、やめてください……」
「はあ、はあ……はああっ…すまぬ…
すまぬ……我慢できんのじゃっ…」
小入道が二人の体勢を挿入しやすい形に導いていく。
そして、マライヤの魔羅が、ブルーラビットの股を割入った。





「よ、良すぎるううッ！！

青兎どのお、ダメじゃ、わしは、あああッ！！」

「らめっ♡らめっ♡らめえっ♡

マライヤさんひっかり…ふああああッ！

えぐってくる、壁の中をえぐってくりゅうううっ♡♡」

二人のヒロインはお互いの性器を

ダイレクトに感じ、よがり狂う。

間に入ってブルーラビットの

口内を楽しみながら二人の乳首をまとめてひねる紅兎。

「兎さん、凄いわあ。

鬼娘のあんなエグイの全部飲み込んでじゃうんだもの。

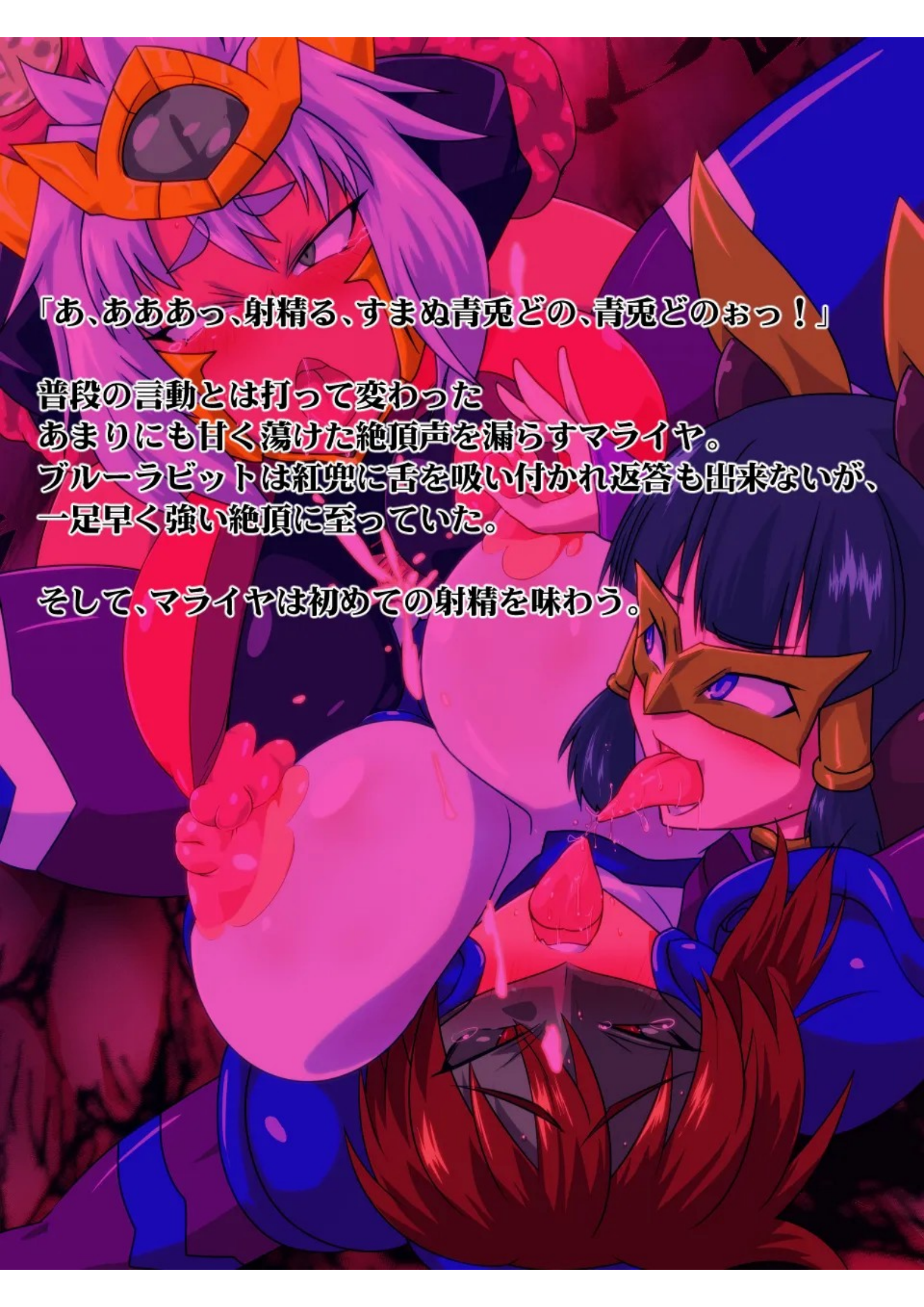
ほら、舌出して……うふふ。かわいいわ、かわいいわよ」

紅兎の舌を受け入れてしまうブルーラビット。

快楽が迸り、膣内を締め上げてしまい、

マライヤもびくびくと体をよじる。





「あ、あああっ、射精る、すまぬ青兎どの、青兎どのおっ！」

普段の言動とは打って変わった
あまりにも甘く蕩けた絶頂声を漏らすマライヤ。
ブルーラビットは紅兎に舌を吸い付かれ返答も出来ないが、
一足早く強い絶頂に至っていた。

そして、マライヤは初めての射精を味わう。





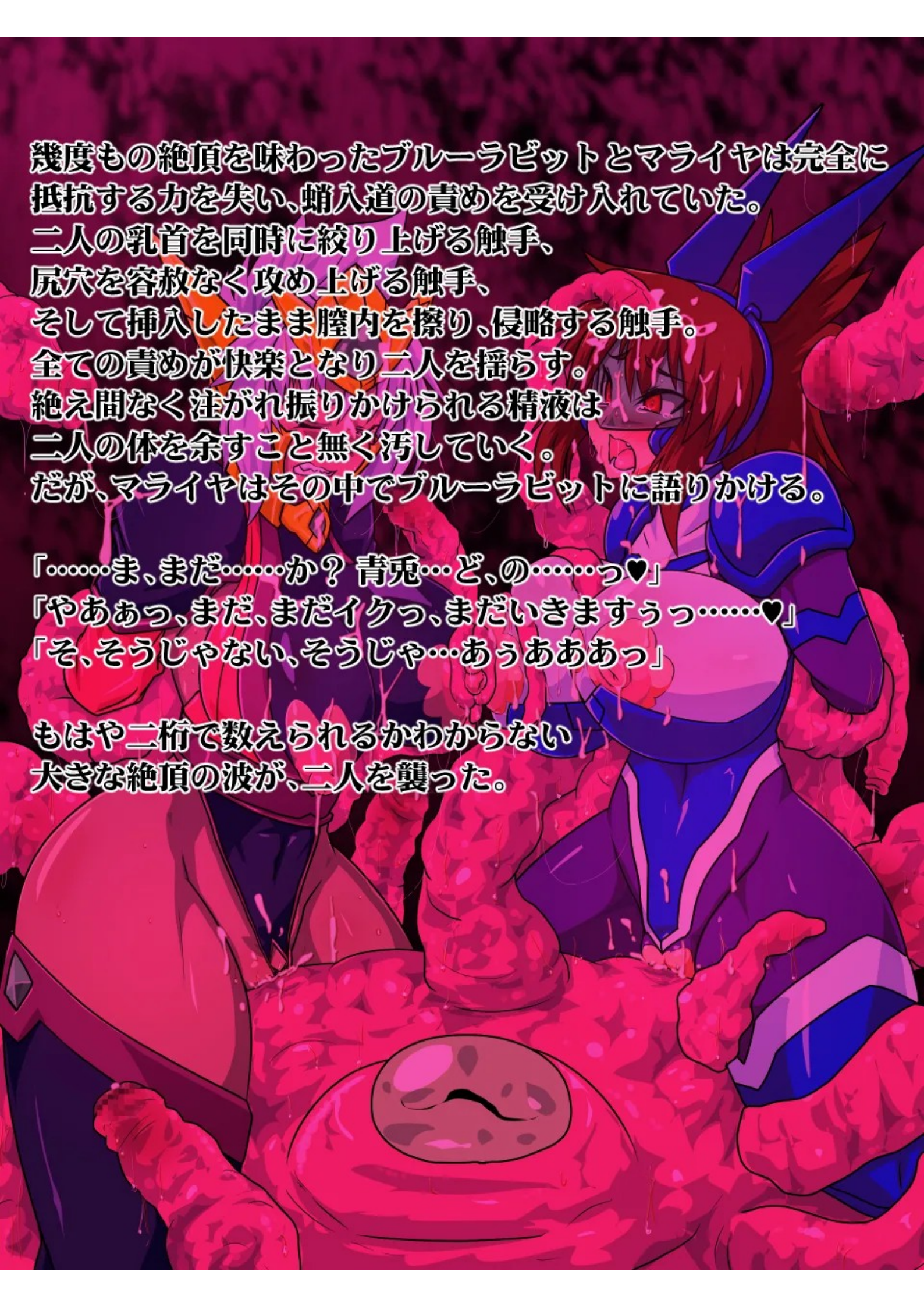
マライヤから出る精液は並の量ではなく、
その勢いはブルーラビットだけでなく、
紅兎、果ては自分にまで飛びかかってしまう。

「ああ…濃おい…♥…すごい。兎さんも満足そう。
うらやましい…私もソレ味わいたいけど、ここは我慢ね…」
マライヤがブルーラビットに覆いかぶさる形で倒れ込む。
いつの間にか彼女の股間の陰茎は消えていた。
「……あら。今で全部霊力を出し切ったの？

まあこれだけの量と濃さだものね…ふふ」
紅兎はマライヤの膣内に指を入れると、
ビー玉程度のサイズになった
例の光を摘みだし、自らの膣内に戻す。
「んっ…ふう。なかなか楽しめたわ。
やっぱり鬼娘も連れ帰って私が飼うほうが楽しいかも……」
独りごちる紅兎の背後で小入道がうごめいた。
いつの間にか小入道は合体し、元の蛸入道に戻っていた。
マライヤに斬られる前よりも巨大になって。
この空間に満ちる淫気が入道に力を与えてしまったのだ。
蛸入道の触手が我慢できなさそうに震えている。

「あは、あなたも当てられちゃったのね。
良いわよ。もう少し楽しんでも。
でも鬼娘はあなたの淫気を取り込んで霊力にする体質だから、
その霊力転換が完了する前に連れて帰るからね」
紅兎の言葉を聞くやいなや、
蛸入道はその触手で倒れたヒロイン二人を絡め取り、
彼女らの膣内に幾度目かの挿入を躊躇なく行った。





幾度もの絶頂を味わったブルーラビットとマライヤは完全に抵抗する力を失い、蝟入道の責めを受け入れていた。二人の乳首を同時に絞り上げる触手、尻穴を容赦なく攻め上げる触手、そして挿入したまま膣内を擦り、侵略する触手。全ての責めが快楽となり二人を揺らす。絶え間なく注がれ振りかけられる精液は二人の体を余すこと無く汚していく。だが、マライヤはその中でブルーラビットに語りかける。

「……ま、まだ……か？ 青兎…ど、の……っ♡」

「やああっ、まだ、まだイクっ、まだいきますうっ……♡」

「そ、そうじゃない、そうじゃ…あうあああっ」

もはや二桁で数えられるかわからない大きな絶頂の波が、二人を襲った。



だが。

「あ、ああ……来る……来る……何か、何か来ちゃう……っ！」

ブルーラビットに異変が起きた。

絶頂のときのような強い痙攣。

マライヤが、薄く笑った。

ぶちっ。

ブルーラビットを拘束していた触手が
全てちぎれ飛び、「燃え尽きた」。

「な……！？」

驚愕する紅兜。その間にも次いで、

マライヤを拘束していた触手も

ブルーラビットが蹴り飛ばすと同様に燃えて消滅する。

拘束を解かれたマライヤは地面に座り込み、深い息を吐いた。

「なにを…なにが起きているの……！？」

ブルーラビットの髪がマライヤのように銀色に染まり、
体からオーラが立ち込めている。

「一か八かじゃったが、上手くいったな。

魔羅移しじゃったか？ 似たようなものよ。

わしはわしの霊力を先程青兎どのに流し込んだのじゃ。

精液としてな。

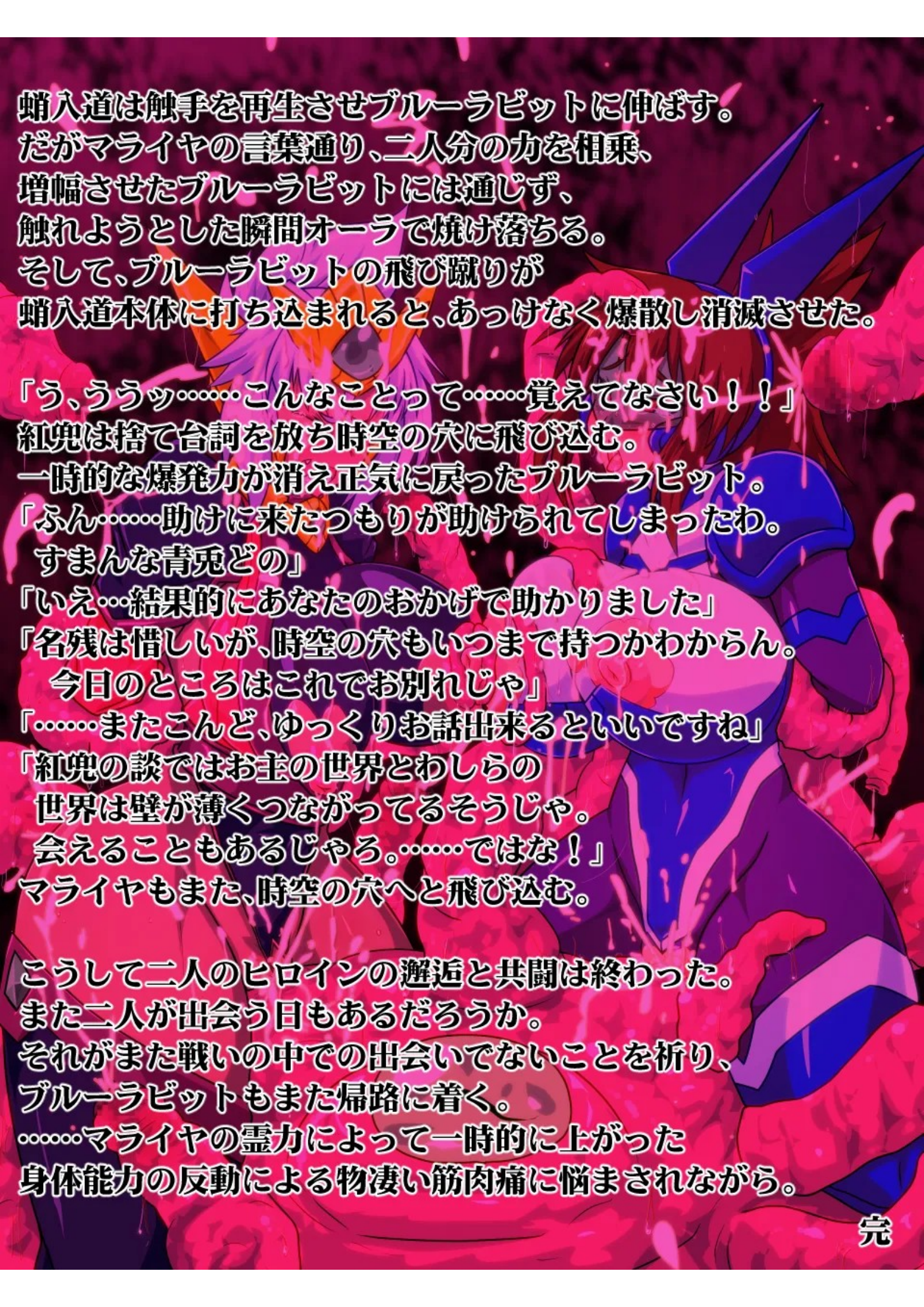
ひと目あった時に思っていたが……どうもその青兎どののは

こっちの世界でのわしと近い体質の持ち主のようじゃ。

わしの霊力を取り込んで自分のものとしてくれたわ。

しかも理屈は知らんが、わしの霊力と青兎どのに

眠っていた霊力がかけ合わさっておるな」



蛸入道は触手を再生させブルーラビットに伸ばす。
だがマライヤの言葉通り、二人分の力を相乗、
増幅させたブルーラビットには通じず、
触れようとした瞬間オーラで焼け落ちる。
そして、ブルーラビットの飛び蹴りが
蛸入道本体に打ち込まれると、あっけなく爆散し消滅させた。

「う、ううッ……こんなことって……覚えてなさい！！」

紅兎は捨て台詞を放ち時空の穴に飛び込む。

一時的な爆発力が消え正氣に戻ったブルーラビット。

「ふん……助けに来たつもりが助けられてしまったわ。

すまんな青兎どの」

「いえ…結果的にあなたのおかげで助かりました」

「名残は惜しいが、時空の穴もいつまで持つかわからん。

今日のところはこれでお別れじゃ」

「……またこんど、ゆっくりお話出来るといいですね」

「紅兎の談ではお主の世界とわたらの

世界は壁が薄くつながってるそうじゃ。

会えることもあるじゃろ。……ではな！」

マライヤもまた、時空の穴へと飛び込む。

こうして二人のヒロインの邂逅と共闘は終わった。

また二人が出会う日もあるだろうか。

それがまた戦いの中での出会いでないことを祈り、

ブルーラビットもまた帰路に着く。

……マライヤの霊力によって一時的に上がった

身体能力の反動による物凄い筋肉痛に悩まされながら。































































